

氏名	宮城島 恭子 (学籍番号 15DN02)		
学位の種類	博士(看護学)		
学位記番号	第 17 号		
学位授与年月日	2019 年 3 月 12 日		
論文題目	思春期から成人期への移行過程における小児がん経験者の自立と親が支えていくプロセス—健康管理と社会生活を両立した自立の支援を目指して—		
論文審査担当者	委員長	大石 ふみ子	教授
	委員	市江 和子	教授
	委員	木下 幸代	教授
	委員	式守 晴子	教授
	委員	新宮 尚人	教授

## 論文要旨

### I. 研究の背景と目的

小児期発症の慢性疾患患者は、成人移行期に多くの発達課題の達成に加え、成人診療科への移行や、治療の意思決定・受診行動を含む健康管理の自立に向けた支援が必要とされる。加えて小児がんでは治療終了後の合併症による身体・心理・社会生活への影響があり、医療機関での長期フォローアップ、多職種による心理社会的支援が求められている。

本研究の目的は、10 歳代で闘病を経験した小児がん経験者が、思春期から成人期への移行過程において健康管理と社会生活を両立し自立に向かうプロセス（第 1 研究）と、小児がん経験者が自立に向かうことを親が支えていくプロセス（第 2 研究）を明らかにした上で、小児がん経験者が自立に向かうことを支えるための看護援助を検討することである。

### II. 研究方法

1. 研究デザイン：因子探索的に収集した質的データを帰納的に分析し理論構築を目指した。半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。

2. 用語の定義：「小児がん経験者の自立」；さまざまな資源を活用しながら、親主体でなく小児がん経験者が意思決定の主体者となり、自らの意思で健康管理をおこない社会生活を営んでいくこと、および健康管理と社会生活の折り合いを自らの意思でつけていくこと。

3. 対象者：第 1 研究では 16～25 歳の小児がん経験者で、10 歳代で白血病、悪性リンパ腫、脳腫瘍、骨腫瘍のいずれかを発症または再発し治療経験がある人を対象とした。第 2 研究では、第 1 研究の条件を満たす 16～25 歳の小児がん経験者の親を対象とした。

### III. 結果

1. 第 1 研究：小児がん経験者が健康管理と社会生活を両立し自立に向かうプロセス

22 名の小児がん経験者のデータを分析した結果、35 の〈概念〉と 7 つの【カテゴリー】が生成された。思春期から成人期への移行過程において小児がん経験者が健康管理と社会生活を両立し自立に向かうプ

ロセスとは、【制約のなかでの調整】から、【普通と自由への挑戦】【制約からの解放】への移行を経て、〈普通の生活と生のありがたさを実感〉〈病気体験を活かせる進路選択〉など【稀少な病気体験を糧にする】こと、【がんによる持続的不安に向き合う】ことをしながら、【自力で生きる術の獲得と準備】をしていくことであった。

## 2. 第2研究：小児がん経験者が自立に向かうことを親が支えていくプロセス

19名の小児がん経験者の親から協力が得られ母親17名、父親2名であった。分析の結果、20の〈概念〉と3つの【カテゴリー】が生成された。10歳代で闘病を経験した小児がん経験者の親は、子どもの退院後の健康管理と学校生活の両立において【慎重な行動を支持】し、〈合併症出現や再発への不安持続〉〈自活力獲得への期待〉に伴う〈保護と子離れの葛藤〉などの【見守りと葛藤】を経験していた。そして、〈生の重みを実感し価値観転換〉〈子どもの発達や努力を認める〉〈やりたいことを後押し〉など【子どもを認めさせる】姿勢で関わり、思春期から成人期への移行過程における子どもの自立を支えていた。

## V. 考察

### 1. 第1研究：小児がん経験者が健康管理と社会生活を両立し自立に向かうプロセスの特徴

【制約のなかでの調整】は健康管理と社会生活が本人の意思にかかわらず一体化した状態であるのに対し、【制約からの解放】は社会生活の比重が増し小児がん経験者本人の意思で行動できる主体性が増していく状態であり、「普通の生活」の実感は思春期から成人期にかけて通常の発達の移行を遂げる上で重要と考えられる。がんという疾患特性による持続的不安を抱く一方、病気体験の稀少価値を活かして自分らしい生き方を見出していることが示唆される。また、【自力で生きる術の獲得と準備】は、それまでのプロセスを踏まえて健康管理と社会生活を本人の意思で主体的に統合した状態であると考えられる。

### 2. 第2研究：小児がん経験者が自立に向かうことを親が支えていくプロセスの特徴

慎重な行動を支持する状態は、親主体の健康管理と生活調整に比重があったが、見守りと葛藤の状態は、親の関与が減り子ども主体の健康管理と生活ペースを見守る姿勢へ移行していると考えられる。しかし、がんに関する心配の持続と自立促進意識をもち、子どもへの関わり方に葛藤しているため、子どもの自立の次のステップまでの過渡的な状態と考えられる。子どもを認めさせる状態では、子ども主体の健康管理と生活調整が促進されていると考えられ、子どもの発達を認めることや親の価値観の転換に着目する必要がある。

### 3. 第1・第2研究の結果の関係と、小児がん経験者と親および親子関係に対する看護援助

小児がん経験者が自立に向かうプロセスと親が支えていくプロセスは相互に対応関係があり、親子が相互作用しながら子どもが自立に向かい、親が支えることで親子関係の発達につながっていくと考えられる。子どもが先行して社会生活への意欲と自立心を親に示すことを、親が受け止め子どもの意欲を後押しするという親子関係が示唆される。しかし、親は心配が先行し慎重に子どもの手を離していくことで、先を見通して社会生活と健康管理のバランスをとるサポート役を果たしていると考えられる。看護者は、第1研究結果の小児がん経験者の体調や生活・発達の变化を親と共有し想定した上で、本人の意思を尊重した調整、本人の健康管理や生活ペースの見守り、アイデンティティ獲得の過程で病気に向き合う姿勢と社会で生きる姿勢が主体的に統合される自我発達の見守りをする必要性が示唆される。また、親の葛藤の

受け止めや親子間の相互理解の促進も必要である。

## VI. 結論

小児がん経験者が健康管理と社会生活を両立させ自立に向かうプロセスは、【制約のなかでの調整】を起点とし、【普通と自由への挑戦】【制約からの解放】を経て、主体的に病気体験を糧にしてがんに向き合い【自力で生きる術の獲得と準備】へ変化していた。小児がん経験者の自立を親が支えていくプロセスは、【慎重な行動を支持】を起点に、【見守りと葛藤】を経て【子どもを認め任せる】姿勢へと変化していた。これらのプロセスは親子が相互作用しながら親子関係を発達させていく過程であることが示唆された。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、10歳代で闘病を経験した小児がん経験者が、思春期から成人期への移行過程において健康管理と社会生活を両立し自立に向かうプロセス（第1研究）と、小児がん経験者が自立に向かうことを親が支えていくプロセス（第2研究）を明らかにした上で、小児がん経験者が自立に向かうことを支えるための看護援助を検討することを目的としている。

本研究の特徴は、①小児がん経験者が思春期後期から成人期初期にかけて直面する複雑な社会生活や心理面・親子関係における変化、小児がんの治療や合併症に伴う身体的問題を反映し多面的な視点から捉えた小児がん経験者が自立に向かうプロセスおよび親が支えるプロセスである、②特に、第1研究では、小児がん経験者が外来通院や短期入院治療の繰り返しによる治療と併行しながら社会生活を維持していく過程を掘り下げ、小児がん経験者の病気との向き合い方と発達課題を関連づけた示唆を提示しながら、健康管理と社会生活を両立し自立に向かうことを長期的視点から理解できるプロセスを明らかにした、③第2研究では、親の気持ちや子どもへの関わり方の変化および葛藤に着目し、治療と併行して社会生活を維持するための保護から、見守りへシフトし自立を期待しながらも子離れできない葛藤、子どもを認め任せる姿勢への転換について掘り下げ、長期的視点から子どもが健康管理と社会生活を両立し自立に向かうことを支えるプロセスを明らかにしたことである。研究方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析をしており、研究方法の基本を理解した上で活用がされていた。

本研究においては、成人期への移行過程における小児がん経験者の自立と親が支えていくプロセスを明らかにすることにより、成人期への移行期の小児看護を考える上で大きな貢献をするものとする。

研究課題を含めた若干の修正点を助言し、再提出された論文を委員全員で確認した。

以上の結果から、本論文において、思春期から成人期への移行過程における小児がん経験者の自立と親が支えていくプロセスは、小児がん経験者支援における新たな知見であり、看護学分野の発展に貢献するものである。審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。